

★『ほおじろ』読者参加版をお届けします。この紙面の主役は読者の皆さま。ご投稿いただいた原稿を中心に、耳寄りな情報を加えてお届けしてまいります。ジャンルを問わず、皆さまからのご投稿大歓迎です！以下のエヌ・アイ・エス広報部宛ご投稿ください。お待ちしております！

(株)エヌ・アイ・エス 広報部

TEL 047-498-4838 FAX 047-498-4839 千葉県白井市根 116-32 川上ビル 202 E-mail: nis@shiroi-nis.com

今回ご寄稿くださったのは、復にお住まいの杉原賢一さん。感性ゆたかな少年の視線でつづる思い出の「コマ」に興味津々……

投稿

杉原賢一 (復)

忘れられない

小学校時代の思い出

―地獄極楽小路と大畑小学校―

一、浦島太郎になった

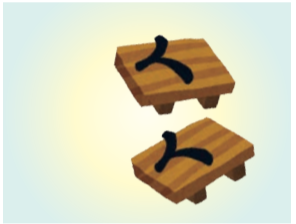
昭和三十年代、ボクは小・中・高校生だった。生まれ育った郷里は、昔は「越後国」といわれ、一年の四分の一近くが雪に覆われる北陸の新潟市。

平成十四年二月。仕事の関係で故郷に帰る機会を得たので仕事の合間を縫って、卒業後四十数年ぶりに母校を訪れた。母校の新潟市立大畑小学校は、市の中心街のほぼ真ん中に有った。戦後生まれの「団塊の世代」と呼ばれる我々の世代にあっては珍しく、どの学年も三学級という、当時としては小規模校だった。だけれど児童数は五十五人という寿司詰め学級だった。

今考えても不思議な事に、学級は六年間ずっと替わらず三組だった。現在では普通に行われている「クラス替え」が一度もなかったのだ。担任の先生だけは二年ごとに三人替わられたが、学級内の顔ぶれは六年間一緒だった。

だが、小学生はマンネリを嫌い、新鮮さを求める年頃だ。そんな状況では、たまの転入生だけが唯一、学級内に新鮮な風を吹き込んでくれる存在だった。もともと六年間での転入生はほんのわずか。その分友達関係は親密で、今の子ども達とは大分違っていたように思う。六十年近くも前の小学校生活だが、心に焼き付いている思い出がある。二、三年生の頃であっただろうか。先

生に頼まれ欠席した女友達の家に学校からの手紙を届けに行った。歩いていたら、履いていた下駄の鼻緒が切れてしまった。鼻緒の切れた下駄では、歩くのはおぼつかない。「困ったなあ。どうしよう…」と思案していた時、「坊やどうしたの」と居合わせた小母さんが、声を掛けてくれた。事情を話す間もなく、小母さんは自分が持っていた手拭いをビリビリと裂くと、あつという間にボクの下駄に新しい鼻緒を挿げてくれた。「坊や、これで大丈夫。気をつけて帰るんだよ」と優しく言ってくれた。「小母さん、どうもありがとう…。全く見ず知らずの人にしてもらった突然の親切にびっくりするのに精一杯で、お礼の言葉もそこそこにその場を離れた。帰宅してすぐに、母に話した。次の日、改めて昨日のお礼をしようとその小路に行ってみたが、小母さんの家は分からず、会う事は出来なかった。



時、六年間の思い出が早送りの映画のようになり返され、この「鼻緒の小母さん」のシーンも、懐かしい思い出として蘇った。校庭の石碑に、校歌が刻まれていた。思わず校歌を口ずさみながら、ボクは一瞬だけ小学生に戻っていた。

浦島が四十年ぶりの小学校

学舎残れど別の世界が

(平成十五年第一稿 今回改稿)

二、地獄極楽小路

ボクが生まれ育った新潟市田中町を離れてから、かれこれ五十四年の歳月が経とうとしている。人は自分の生まれ育った土地、地域の本当の魅力や特色を、住んでいるときにはあまり自覚する事はなく、遠く離れて生活するようになって、改めて気がつくものなのかもしれない。「新潟市のへそ」ともいわれる「古町十字路」の北西五百メートルの所に、現在では桜のきれいな場所として知られる「西大畑公園」がある。

一方、公園の反対側には、新潟市で「鍋茶屋」と並んで最高級料亭とされる「行形亭」がある。この公園と料亭に挟まれた細い小路は、「地獄極楽小路」と呼ばれている。どうしてこんな奇妙な名前が付いたのだろうか。

文章あれこれ ⑪

高山修一

漢字を多用し、辟易する程に難解な論文を書く学者が居る。一方で、円転滑脱、達意の文章が得手の作家も存在する。書籍の取捨選択は読者の随意。意の儘に購えば好いのである。

以上、わざと、むずかしい字、語句を用いて書いてみた。しかめっ面しく、段落すべてが黒っぽく見えるはず。――この段落以下、おおむねいつもの書き方にもどります。

内容がともかく、文章は漢字とひらがなの割合で、読む側がうける印象にかなり違いがある。どの字がいいか。

付いたのだろうか。それは、現在では公園になっている所には、実は昭和四十六年まで「新潟刑務所」があったからだ。「地獄」(刑務所)と「極楽」(行形亭)を隔てている路地であることから、いつしかこの名前がついたのだろう。ボクはこの「地獄極楽小路」を利用して六年間、大畑小学校へ通った。もともと最初からこの小路を選んだ訳ではない。自宅から学校までの間に刑務所があったので、迂回しなければならぬ。迂回するには表道(時計回り)と裏道(時計回り)の二通りの道があった。

舗装されていない細い裏道の方が幾分近いので、一年生になったばかりのボクは、母親に手を引かれて学校に通った。どうしてかという、通学の途中でねずみ色の服を着たおじさん達が、高いコンクリート塀の外側の畑で作業をしている脇を通らなければならぬからだ。信じられないような話だが、畑がなんと刑務所の塀の外(一般の人が通る道のすぐ脇)にあったのだ。

鉄条網の柵で遮られてはいたが、おじさん達が作業の合間に、時々ちらっとこちらを見る。恐がりだったボクにはとても耐えられなかった。目を合わせないようにならなければならぬ。少しづつ母親について来た

「居る」は「いる」でよく、「好い」は「よい」と書くこともあり、逆もある。正書法(正しいつづり方)のないこの国では、漢字、かなの使い方はその人による。気分、感覚次第で問題はないのだ。文体の統一感を好む人もいれば、表現の多様性を愛する向きもある。

漢字は文がひきしまり、リズム感がある。速読にいいが、用いすぎるとかた苦しくなる。逆に、ひらがなが多いとやわらかくなるが、読みにくい。過ぎると、だれた感じになる。手書きでは漢字とかなのバランスのよしあしは気づきにくい、印字するとひと目でわかる。書いたら、プリンアウトして推敲すると、わかりやすく読みやすい文章になる。

てもらおう距離を縮め、何とか一ヶ月後には一人で通えるようになった。

でも、それからまもなく、ボクの通学路は自然に表道に変更され、途中にある「地獄極楽小路」を通るようになった。

両親が少し遠回りでも安心できる道の方を選んだからだ。左右を高いコンクリート・煉瓦塀(刑務所)と木造の黒塀(行形亭)に挟まれた「地獄極楽小路」を昼間しか通ることのなかった幼いボクには、この小路の持つ意味が何なのかを知るよしもなかった。

刑務所の反対側の「行形亭」を意識し始めたのは、小学校の高学年になってからだ。運動会の前になると、紅白のリレーの選手を選ぶのだが、その選手決め場所が、この「行形亭」の門の前の道だった。直線距離にして百メートルはあっただろうか。車の往来もそんなに無かった時代、そこは選手決めには絶好のコースだったのだろう。ボクの運動神経は、男子の中では三番手以下で、いつも補欠に甘んじるしかなかった。

そんなある日、好奇心旺盛な友達と二人で、思い切って「行形亭」の門をくぐって中に入ってみることにした。

するとどうだろう。敷地の中には今まで見たこともないような美しい庭が広がり、黒松の生える築山と大きな池が目の前に現れ、錦鯉が泳いでいるではないか。住んでいる長屋の粗末な家とは比べようもない、全く別世界の立派な建物が、ずつと奥まで続いている。「浦島太郎の竜宮城は、こんなところにあったのか!」。

一瞬、そんなことを考えた。それから、学校帰りに何回となくそこへ立ち寄り、御殿のようなたたずまいを楽しんだ。ときには女の子も誘って……

ところがある日、いつものように庭を眺めていると、きれいな着物を着た女の子がやって来て、「ここは君達のような子どもの来るところではないから、明日からは来ないようにしてね」と告げられました。

こうしてボク達の「料亭遊び」は、あっけなく終わってしまった。

新潟に地獄極楽隔つ道

片や料亭 此方刑務所

(平成二十八年二月十四日(日))